

令和6，7年度委員の感想から（抜粋）

- 「探究的な学び」を進めていく上で必要なことは、生徒も私たち教員も“わくわく”すること。これまでの私は生徒たちの学びを誘導するような授業の展開をしていました。しかし、この委員会で実際に自分が体験したこと・学んだことは、それとは全く違ったものであり、この時間が楽しくて“わくわく”していました。
- 正直、私の総合学習は予定調和そのもので、生徒から「探究」という貴重な経験の機会を奪ってしまっていたと感じます。今、目の前にいる子ども達とトライ&エラーを繰り返すような新たな挑戦を試みたいと感じています。
- 2年間、この委員会で最も感じたことは「教師も探究者である」ということです。探究的な学びを構想する上で、まずは教師が一人の探究者として材に出会うことが大切なのだと感じました。また、委員の先生方と共に意見交換する中で、自分とは違った視点で分析していらっしゃる先生方が多く、非常に勉強になりました。
- 2年間の委員会は「探究的な学び」とは何か、どうすれば「探究的な学び」となるのかを自身でも探究されている先生方とお会いし学ばせてもらう貴重な機会となりました。これからも、目の前の生徒の様子をきちんと見ることを通し、彼らの「探究的な学び」を後押しできる教師であり続けたいと思います。
- 今思うと、この委員会での活動そのものが、まさに「探究的な学び」であったと思います。自分が感じたこういった経験を生徒も学びとして経験できるよう、今後もさらに「探究的な学び」について考え、実践していきたいと思いました。
- 2年間の研修を通して、私の最も大きな学びは「どう教えるか」よりも「何を指すのか」に立ち返ることの重要性である。教師は答えを与える存在ではなく、子どもが立ち止まり、迷い、挑戦するときに寄り添い、必要な手だてを差し出す伴奏者であるべきだと考えるようになった。

